

# 仙台の城下絵図について

後藤 雄二

近世城下町の歴史地理学的研究における第1の史料としては、城下絵図があげられる。各城下町を研究する前提として、城下絵図を利用し、侍屋敷・町屋・寺社などの土地利用図が作成される。その史料としての吟味については、「城下絵図の地図学史的研究」と名づけた矢守氏の研究がある(1973, 1974, 1978, 1979)。これらの冒頭で、城下絵図史の〈タテ〉と〈ヨコ〉の両面からの研究を行い、それらを総合する必要を指摘している。この小論では、矢守氏の研究をふまえながら、仙台の城下絵図を例として、他の視点をも加えながら取上げたいと思う。しかし、仙台についてはすでに、阿刀田氏(1936)によって、絵図の分類・年代推定等について、詳細な分析と記述が行われている。そこで、ここでは、手もとにある17世紀の諸絵図と関連史料を利用して、それから得られる具体的事項の検討を行いたい。取上げた城下絵図は、表1にあげた7葉で、元禄4・5年図を除いて、総て阿刀田氏による分析が行われているが、年代推定については、疑問点や、年代をより短い期間に限定できるものもあるので、筆者の検討を加えた、対象とする絵図は、すべて城下の全体図である。

## 1. 城下絵図作成の目的

作成の目的から、矢守氏(1973)は、藩用図・幕用図に分類している。矢守氏の定義によれば、幕用図とは、「国絵図の調進に伴って、あるいは巡見使の来藩、城郭修理の願出などに際し」提出した「幕府への城絵図・城下絵図」となる。仙台の城下絵図のなかで、この幕用図に相当するのは、正保2・3年絵図と天和2年の絵図である。前者は、いわゆる、正保の城絵図である。阿刀田氏は、これらを、「幕府提出用城下絵図」として詳細に述べているので、重複はさけることにする。しかし、そのなかで、天和2年の絵図について、「或はこの際にも全国的規模に於いて城絵図の製作が行はれたものであるかも知れぬ」と述べているが、これは、仙台藩だけに命ぜられたと思う。

この2葉を除くと、仙台の城下絵図は、すべて藩用図で、侍の屋敷割が描かれている。藩用図の作成目的については、そのひとつとして、普請奉行に関連があることは、矢守氏(1978)により指摘されている。仙台藩では、享保13年(1728)の「五人組牒前書」と、同年の「御屋敷方御定」<sup>(注1)</sup>には、それぞれ次の定めがある。

「屋敷所持之者、名改代替之節へ御屋敷方へ断牒面可相直候、侍分之者へ直々相断、侍分外街頭より可申遣候事」「五人組牒三ヶ度分ツ、取置、跡々古牒へ相捨不苦候事」

仙台では、17世紀に城下が拡大したが、この時期には、屋敷主の変化が著しい。この変化のほかに、代替・改易・新規召抱などによる屋敷主の変化がある。これらを把握するために屋敷奉行が

(注1) 仙台市史編纂委員会編(1953):仙台市史8所収。

おかれ、侍屋敷の五人組牒が作成されていたのである。城下絵図も同じ目的で作成されたのであろう。

## 2. 城下絵図の年代推定

絵図に作成年次が記載されている場合には問題は少ないが、その他については、年代の推定が必要である。しかし、それは、推定年代に幅が与えられる。大まかに、城下の拡大・土地利用の変化を対象とするには、各世紀の前・中・後期の区分がわかればよいであろう。しかし、短い期間内の変化を扱うには、より精確な年代の推定が必要である。矢守氏(1979)によれば「金沢御次御用絵図」は、測量に3年4か月ほど、絵図作成に2年4か月ほど費された。時間スケールが短ければ、「作成年次」と「景観年次」との区別が重要になる(矢守, 1974)。目的により、作成年次と景観年次のどちらを問題にするかは異なるといえるが、景観年次は、何年何月という一時点であるとするよりも、調査期間の幅というものを考慮すべきであろう。絵図に作成が終了した年次が記載されていても、景観年次はそれよりも早いのが普通であるから、他に推定する史料があれば、目的に応じて行いべきである。新たに絵図を作成するとき、以前に作成された絵図がある場合には、城下拡大の地区や、土地利用が変化した地区についてのかきたし、かきかえのみで、絵図作成の期間も少なくすむ。阿刀田氏は、延宝期の絵図が、寛文期の絵図に、「その後発展した部分を描き加えたもの」であることを、1葉の絵図から類推している。屋敷主の変化だけの場合は、さらに簡単であるから期間は短縮されるであろう。ただし、貼紙を使用すれば、より簡単になるのはいうまでもない。

景観年次については、それが、屋敷主についてであるか、道路・橋・寺社などであるかにより異なる。景観年次を侍の屋敷主によって推定する確実な方法としては、改易・新規召抱の侍を利用するのが、代替による変化よりも重要視してよい。代替となっても、子の名に書改めない可能性も考えられるからである。もちろん、併用が望ましいのは当然である。仙台藩の根本史料としては、「伊達治家記録」<sup>(注2)</sup>があり、これが、屋敷主の景観年次の推定に利用できる。阿刀田氏が利用した史料は、仙台の古地誌などであり、「伊達治家記録」は利用していないと思われる。元禄4・5年図は、阿刀田氏の調査時点では発見されておらず、「仙台市史9」<sup>(注3)</sup>の附図解説のなかで、年代推定されている。そこで、表1の絵図のなかで、幕用図と、作成年次が記載されており、また、景観年次との差がほとんどないと思われる寛文4年図を除く他の4葉の絵図について、年代の推定を行う。以下で、特にことわらない限り、筆者の推定は、「伊達治家記録」による。また、図の名称は、阿刀田氏の論文による。

### 2.1. 寛文8・9年図

阿刀田氏は、高力左近が藩に預けられた寛文8年を上限とし、伊東采女屋敷が存在することから、寛文9年を下限としている。そして、「寛文7年に榴ヶ岡に移った筈の天神社が尚小田原にあるのは奇とすべきであるが、絵図製作に当って新しく測量などを行はず、前図の人名のみを書改

(注2) 伊達治家記録, 宝文堂刊。

(注3) 仙台市史編纂委員会編(1953)仙台市史9。

めた結果生じた誤であろう。」として、寛文8・9年説を述べている。しかし、寛文6年切腹を命ぜられた宮崎筑後の屋敷が存在するし、また、侍の屋敷主の変化数を全城下についてみると、この絵図は、寛文4年図、寛文9・10年図の両図に対して、ほぼ、3対16であることから、寛文8・9年説には疑問点が残る。上限は、古内治太夫が寛文6年8月志摩と改名したが、その屋敷があることから、寛文6年ではないかと考える。これによれば、寛文7年移された天神社が小田原に存在することは説明できる。しかし、これでは、阿刀田氏が上限決定に採用した高力左近屋敷についての説明ができない。寛文6年説を提示して後考を待ちたいと思う。

## 2.2. 寛文9～11年図

阿刀田氏は、遍照寺と伊東刑部屋敷の存在から、上限を寛文9年とし、また、寛文事件で改易となった原田甲斐の屋敷が存在することから、下限を寛文11年とし、寛文9～11年と推定している。上限については、寛文9年2月、早川淡路が死去し、子の庄八が継いだ<sup>(注4)</sup>が、その名があることから、正しいと思われる。また、柴山氏は寛文10年氏家と改姓したが、図ではまだ柴山氏と記されていることから下限が定まり、寛文9・10年と推定される。

## 2.3. 延宝6～8年図

阿刀田氏は、古地誌のいくつかの記述から、延宝6～8年を提示しているが、筆者は、伊達治家記録の家督相続の全記録から、延宝8年と推定した(延宝3年記録所がおかれ、記事が詳しくなる)。

## 2.4. 元禄4・5年図

仙台史9の附図解説には、元禄5年10月割崩された飯塚出雲の屋敷がまだ小屋敷となっていないことを下限とし、石川大和が死去した元禄4年正月18日を、屋敷主が子の中務に移っていること<sup>(注5)</sup>から上限としている。筆者は、元禄5年9月に拝領した福井氏の屋敷が存在することから、元禄5年と推定した。

表1 17世紀の仙名城下絵図

No.	名 称	年 代 推 定		大 き さ	所 蔵	備 考
		(阿 刀 田)	(筆 者)			
1	奥州仙名城絵図	正保2・3年		1丈8寸×8尺8寸	斎藤報恩会	「仙名城下絵図の研究」附図
2	仙台御城下絵図	寛文4年		1丈2尺3寸5分× 1丈1尺9寸5分	宮城県図書館	
3	仙台下絵図	寛文8・9年	寛文6年	6尺5寸×5尺5寸	旧制二高旧蔵 (焼失)	「仙名城下絵図の研究」附図
4	仙台下絵図	寛文9～11年	寛文9・10年	6尺3寸×5尺5寸	宮城県図書館	
5	仙台下大絵図	延宝6～8年	延宝8年	1丈4尺×1丈2尺	宮城県図書館	「仙名城下絵図の研究」附図
6	奥州仙台城并 城下絵図	天和2年		1丈1尺3寸× 8尺5寸	宮城県図書館	
7	仙台下五蔵 封絵図	元禄4・5年	元禄5年	1丈6尺3寸×2丈	斎藤報恩会	「仙台史9」附図

(注4) 伊達世臣家譜、復刻版、宝文堂刊。

(注5)、(注4)に同じ。

### 3. 城下絵図から得られる具体的事項

城下絵図を研究のために利用するとき、得られる情報の種類が問題である。城下の全体図では、幕用図と藩用図では、当然異なる。幕用図では、屋敷割が描かれず、ブロックごとに、侍屋敷・町

屋などの注記が施されている。これから、城下の土地利用区分図が得られる。藩用図からは、屋敷主の姓名・屋敷の広さなどが得られる。これらについて、若干検討を加えることにする。

#### 3.1. 絵図の精度

近世後期には、精度の高い絵図も作成されたが、17世紀においては、精度には限界がある。その修正方法として、現代地図に土地利用をおとし、全城下で縮尺が統一される様にする必要がある。特に、複数の絵図を年代順に並べて土地利用の変化を比較するには、絵図間の縮尺の不統一をなくすために、上述した方法が必要である。しかし、逆に、城下絵図を分析するに際し、縮尺の城下内でのバラツキは、いくつかのことを指摘している。

図1・図2は、正保2・3年図と寛文9・10年図のそれぞれについて、城下中央部における現代図に対する絵図の線分比を基準として(図中央の太い線分比を1.00とする)、各地区の線分比の割合から、絵図のゆがみの程度を示したものである。正保2・3年図は城の周辺部分が、城下中央部の2倍あるが、城下南東部では、2分の1ほ



図1 正保2・3年図のゆがみ



図2 寛文9・10年図のゆがみ

どになっている。これについては、矢守氏(1973)も指摘している様に、城絵図の性格が現われているといえよう。ただし、道路には長さが記入されている。一方、寛文9・10年図では、川の付近と、城周辺でゆがみが大きい。これは、測量が困難であったことによると思われる。図1・図2には、土地利用の境界線も記入したが、その周辺でゆがみが大きく変化することはなかった。絵図の精度が

表2 各絵図のゆがみ

線分の 番号	正保 2・3年図	寛文 6年図	寛文 9・10年図	延宝 8年図	元禄 5年図
1	2.10	1.07	1.25	1.07	0.94
2	1.27	1.26	1.30	1.30	0.93
3	0.75	0.99	0.93	0.99	0.91
4	0.80	0.99	0.99	1.00	0.96
5	1.01	1.03	1.11	1.05	1.08
6	0.89	1.05	1.14	1.08	0.97
7	0.70	0.92	0.98	0.99	0.99
8	0.48	0.91	0.95	0.92	1.02
9	—	0.94	0.97	0.96	0.95
10	—	—	—	1.01	1.01

測定方法は、図1・図2と同じ

高い場合には、注記がなくても屋敷の広さが計測できるが、精度が低い場合には、土地利用の状態できえ、現代図におとすのは、特に周辺部では難しい。しかし、屋敷の広さは、図2の精度であれば、城下でのゆがみの状態(城下では、東西・南北という直交する方向に測定することが必要であろう)で修正し、広さを描くときの誤差を考えあわせて、ある程度の議論ができよう。しかし、一軒ごとの広さについての議論はできず、地区の傾向をさぐるために用いられる程度であろう。

表2は、5葉の絵図について、図1・図2と同じ方法で測定したものである。仙台の城下絵図によれば、正保2・3年図と寛文4年図間、寛文9・10年図と延宝8年図間で、それぞれ、城下の拡大がみられる。そのため、正保2・3年図では、測定は8か所となっている。絵図のゆがみを利用すると、各絵図間の関連、つまり、新しく作成する場合の基図が存在するかを推定できる(矢守, 1973), 表2から、寛文6年図と延宝8年図は、図のゆがみがほぼ同じ傾向にあることから、阿刀田氏の先述した指摘が、この点からも検証されよう。しかし、両図は、大きさが異なっていることから、直接の基図ではないであろう。この方法は、大ききの異なる絵図について、利用できるという特徴がある。

### 3.2. 屋敷主

侍屋敷には、藩から拝領した侍の姓名を記している。しかし、これは、その侍が屋敷に常住していることを必ずしも意味しない。江戸での常詰であっても、家族だけは仙台に居住することはあると思う。また、仙台藩では、地方知行制による在方居住が行われ、「宿守」が屋敷拝領主にかわって居住していることもあった。屋敷内には、屋敷拝領主の家族・陪臣のほか、借地が行われることや、分家をして同じ屋敷内に居住することが考えられる。以上のことは、城下絵図を利用して、侍の居住分析を行うに際して注意を要する点である。

絵図の年代が推定されたとき、屋敷主についての他の史料があれば、それと対比して研究を行うことができる。しかし、絵図に直接、侍の禄高が記入されてなければ、かなり制約がある。中林氏(1977)の鳥取城下における研究で、10年を隔てた城下絵図と、「組帳」による禄高100石以上の侍519人のうち氏名の合致するのは、約3分の1にすぎない。年代を隔てない仙台の寛文9・10年図と寛文10年侍帳を対比しても、地方知行侍では、半分ほどしか姓名は一致しない。これは、代替が

(注6)

行われたこと、侍のすべてが屋敷を拝領していないことのほかに、侍にはいくつかの名があることが理由と考えられる。「伊達世臣家譜<sup>(注7)</sup>」には、初称、中称などの記載があり、改名しても以前の名も使用することが考えられる。ほかにも、他の史料との対比が考えられるであろうし、そこでの問題もあるであろうと思われる。

#### 参 考 文 献

- 阿刀田令造 (1936)：仙台城下絵図の研究。斎藤報恩会博物館図書部研究報告，4，134P。  
中林 保 (1977)：近世鳥取藩の城下町。歴史地理学紀要，19，67～107。  
矢守 一彦 (1973)：米沢城下絵図について—地図史的考察の試み。史林，56，285～303。  
——— (1974)：都市図の歴史—日本編（第一部，第三章）。講談社，478p。  
——— (1978)：福井城下絵図史について。藤岡謙二郎先生退官記念事業会編「歴史地理研究と都市研究 上」，238～247。大明堂。  
——— (1979)：「御次御用金沢十九枚御絵図」とその作成過程について。人文地理，31，77～88。

---

(注6) 仙台市博物館所蔵。

(注7)，(注4)に同じ。